The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スピーチレベルと心理的距離・社会的距離：断りの分析をもとにして
Author(s)	ボイクマン, 総子; 森, 一将
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89856
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

<研究論文>

スピーチレベルと心理的距離・社会的距離
——断りの分析をもとにして——

ボイクマン総子・森　一将

〈キーワード〉 スピーチレベル　サブ・スピーチレベル　社会的距離　心理的距離　ポライトネス　断り

1．はじめに

丁寧体と普通体、いずれで話すかというスピーチレベルの選択について、その選択の要因を聞き手との関わりから見た場合、丁寧体は、普通、話し手が聞き手に対し心理的に距離を感じ、尊敬の気持ちを表したいとき、一方、普通体は親しくて敬意表現は必要のない聞き手に対し使われる（Hasegawa 2006）。では、聞き手に対し敬意を表しつつ同時に親しさも表明したいときや、敬意も親しさも表さないときには、どのような言語形式が用いられるのだろうか。本研究では、聞き手に関わるスピーチレベルの選択は、聞き手との社会的距離と心理的距離に対する、話し手の認識を指標するものと捉え、丁寧体と普通体に代表される日本語のスピーチレベルの諸形式について、それが聞き手に対する社会的距離と心理的距離の指標にどのように関わっているのかを探る。

本稿では、社会的距離がある（大きい）とは、話し手が聞き手を自分より上の立場の者（または、自分を聞き手より下の立場の者）として扱う、つまり、敬意（deference）を表すべき相手として聞き手を扱うことを意味する。対して、社会的な距離がない（小さい）とは聞き手を同等（または下）の立場として扱う、つまり、敬意を表さなくてもいい相手として遇することを意味する。そして、心理的距離とは話し手の聞き手に対する親疎の認識を示すものと考える[1]。

さて、次の（1）～（5）は、誘いに対する断りとして想定される発話であるが、本稿で扱うスピーチレベルの諸形式とは、次の（1）～（5）のような表現のことで

ある。

(1) 他に予定があって、行けないんです。
(2) 他に予定があって、行けないんだ。
(3) 他に予定があって、行けないんですよ。
(4) 他に予定があって、行けないんだよ。
(5) 他に予定があって／ありまして。

(1) は丁寧体の言い切り、(2) は普通体の言い切り、(3) (4)[2]はそれぞれに終助詞「よ」を伴った形式である。(5) の中途終了型発話は直接的にはスピーチレベルに関わらないが、スピーチレベルを論じるときに欠かせない形式である[3]。(1) に対して (2)、(3) に対して (4) は、聞き手を同等（または下）として認識している発話である。また、(1) よりも (3)、(2) よりも (4) のほうが心理的距離の近さを示しているように感じられる。これは、「よ」が話の場に聞き手を巻き込むという相互作用の機能をもつ（Ogi 2017）からであろう。しかし、ここで「よ」以外の終助詞も心理的な近さを示すのかという疑問が生じる。では、社会的な距離についてはどうだろう。(2) と (4) では社会的な距離に関して顕著な差は感じられないが、(1) と (3) では (1) のほうにより敬意や改まりが感じられる。しかし、それは心理的距離に影響を受けているからだという解釈も捨てきれない。そこで、言い切りの (1) や (2) が終助詞などを伴う (3) や (4) より、聞き手を自分よりも上の者だと認識し敬意を指標する言語形式であると判断するには、年齢や地位などの社会的な距離の指標に影響を与える変数と聞き手に親しみを感じているかどうかという心理的距離の指標に影響を与える変数を区別し、それらがスピーチレベルの選択にどう反映されているかを分析する必要がある。さらに、中途終了型発話 (5) は文末が不明なためスピーチレベルが特定できないが、発話が途中で終わっていることに話し手の社会的距離や心理的距離に関する何らかの意図があると思われるため、分析に加える[4]。

まとめると、本研究では、上司や親友など話し手から見た社会的な関係が上または同等の聞き手と、その聞き手に対する親疎の変数によって断りのデータのス

ピーチレベルを定量的に分析する。その際、話し手が聞き手に対して下す上／同等や親疎の判断がスピーチレベルの諸形式の選択にどう関係するのかを探る。

2．先行研究と研究の背景

2－1．スピーチレベルと社会的距離・心理的距離の指標

Ochs(1990:292) は、「伝達行動のレベルでことばが社会的・文化的状態を指し示す様態」のことを「指標性」と呼ぶ。これを丁寧体や普通体の使用に当てはめると、丁寧体は聞き手に対する敬意と同時に心理的距離を、普通体は心理的距離の近さと同時に敬意が不要であることを指標することになる。尚、本稿では「(社会的な) 距離の大きさと敬意は比例する」(片岡 2002:25) と見る。ただし、慇懃無礼ということばがあるように丁寧体が常に敬意を表すとは限らないし、普通体使用が親しさではなく無礼だと受け取られるケースもある。会話ではやりとりにおいてその都度聞き手がそれをどう受け取ったかで発話の意味が構築される (Eelen 2001) ためである。しかしながら、通常、敬意（社会的距離）と心理的距離を表したい場合には丁寧体、敬意を表する必要がなく親しさを表したい場合には普通体が使用されるのが「標準ないし規範」(滝浦 2016:81) である。では、(1)～(5) でみたように、スピーチレベルを詳細に分けた場合も同様のことが言えるのだろうか、本稿ではその解明を行いたい。

2－2．スピーチレベル

本稿でのスピーチレベルの定義は、「場面や会話の相手をめぐる話者の認識が指標された言語形式のレベル」(三牧 2013:72) とする。この場合の場面とは、改まった場面、くだけた場面などのフォーマリティーに関わる場面である。

発話のスピーチレベルは文末が丁寧体か普通体かで主として決定され、それぞれ、待遇レベルがより低いとされるレベルがある。例えば、三牧(1989, 2013) は、丁寧体よりも「ややレベルを低下させたスピーチレベル」(三牧 2013:72) を設けており、それは、丁寧体の言い切りに (6) のような形を伴う言語形式を指すという。

（6）丁寧体の言い切り形＋・「よ」「ね」等の終助詞の付加（文法的に義務的ではない場合）
・「けど」「が」等の付加による婉曲化
・疑問の終助詞「か」の脱落 （三牧 2013:73）

ただし、普通体に関しては、普通体よりもスピーチレベルを下げた形式があるが、それが「普通体よりスピーチレベルが低いかどうかは明白ではない」（三牧 2013:73）と述べている。このように、三牧は丁寧体の言い切りよりも「ややレベルを低下させたスピーチレベル」として（6）を認定しているが、「ややレベルを低下させた」が具体的に何を意味するのかについての説明は行っていない。

佐藤・福島(1998）は、「ね」「よ」のついた普通体はそれらが付かない普通体より待遇レベルが低いと日本語母語話者に認識されていると述べている。この結果を援用し、丁寧体に「ね」「よ」を伴う形についても「それらが付かない形よりも相手との心的距離の近さを表している」（佐藤 2000:9）と主張する。このことから、待遇レベルの低さと心理的距離の近さを区別せず論じていることがわかる。

以上、スピーチレベルには、「丁寧体の言い切り」「終助詞などを伴った丁寧体」「普通体の言い切り」「終助詞などを伴った普通体」の４形式が想定できるが、これらの４形式の選択が社会的距離、心理的距離のどちらにより関係づけられるのかについては先行研究では明らかにされていない。

尚、本稿では、「丁寧体の言い切り」をフォーマルレベル（以下、Formal)、「終助詞などを伴った丁寧体」をサブ・フォーマルレベル（Sub-formal)、「普通体の言い切り」をインフォーマルレベル（Informal)、「終助詞などを伴った普通体」をサブ・インフォーマルレベル（Sub-informal）と呼ぶ。そして、単に「丁寧体」と述べるときはFormalとSub-formalを、「普通体」と述べるときはInformalとSub-informalのことを指す。中途終了型発話については、Incompleteと記す。

２－３．サブ・スピーチレベルの分類

先行研究においてスピーチレベルを下げた形式（三牧 1989、2013)、待遇レベルが低い（佐藤・福島 1998、佐藤 2000）などと呼ばれる「終助詞などを伴った

丁寧体や普通体」の「終助詞」に何を含み、それらをどうカテゴリ化するのかについては、三牧(1989,2013) と、佐藤・福島(1998) 及び佐藤(2000) では見解が異なっている。また、伊集院(2004) は、終助詞を (7) のように２タイプに分け、スピーチレベルの分析を行っている。

(7) (丁寧体／普通体の言い切り) ＋・終助詞「ね」「よ」
・「ね」「よ」以外の終助詞

伊集院は「ね」「よ」以外の終助詞に、終助詞化した接続助詞「けど」「が」「から」「し」も含めている。「けど」「が」は、単なる前置き表現・言いさし表現であって後続文との間に逆接の関係がない時・後続文が存在しない時、「から」「し」には、後続文との間に因果関係がない時・後続文が存在しない時に終助詞化したものとみなしている。このように、スピーチレベルの研究においては何をスピーチレベルに関わる終助詞として含めるのかに関し共通の認識があるわけではない。

では、終助詞の研究において終助詞は、どのように分類されているのだろうか。国立国語研究所(1951) で取り上げられている終助詞には「ね (え)、な (あ)、よ、や、え、い、さ、ぞ、ぜ、わ、か、とも、かしら (ん)、こと、の、のよ、のに、に、(つ) て、(つ) てば、(つ) たら、(つ) てよ、もの、ものか、ろ、な (勧誘)、な (禁止)、け、けれども、けど、やら、だ (ね)、です (ね)」がある。終助詞は種類も多く、一つの終助詞の用法が多岐にわたっており本質的な意味を捉えるのが難しい。それ故、複数の終助詞について統一的な説明を行っている研究は多くはない。そこで、体系的な説明を行っている佐治(1957)、滝浦(2008)、Ogi(2017) を挙げ、サブ・スピーチレベルに現れた終助詞のカテゴリ化を行いたい。

表１　佐治(1957)の終助詞の特徴

第一類 聞き手めあて		ね・な	話しかけ問いかける気持。
		よ・や・え・い	呼びかけ押し付ける気持。
		さ	突っぱなし放り出す気持。
第二類 判断めあて	確かだという態度 （聞き手に対する働きかけを含む）	わ	聞き手をおしのける。
		とも	聞き手を受け入れる。
		ぞ・ぜ	聞き手に押しつける。
	不確かだという態度（聞き手に対する働きかけを含まない）	か	一般に不確か。

佐治(1957）は、表１のように、終助詞を「聞き手めあて」と「判断めあて」に分けている点が先駆的であるが、「か」以外の「判断めあて」の終助詞は全て聞き手に対する働きかけを含んでおり、「聞き手めあて」との区別が曖昧である。

滝浦(2008）は「終助詞とは、発せられる情報の管理について話し手自身がメタ的な言及をするモダリティ形式である」(p.135）と定義し、「か、よ、ね」の本質的な意味を（7）のように素性指定という形で説明している（滝浦 2008:137-138)。

(7)「か」の素性［−話し手］の意味は“話し手の判断留保・判断放棄”である。
「よ」の素性［+話し手］の意味は“話し手の一方的言明”である。
「ね」の素性［+聞き手］の意味は“聞き手への共有の確認・促し”である。

さらに、滝浦は、「か、よ、ね」は「対事的・対人的な〈距離〉の方向性を持っている」(p.152）とし、終助詞が付かない場合と比べると、「か」は潜在的にネガティブ・ポライトネス（Brown & Levinson 1987）の傾向を持ち、「よ」と「ね」は潜在的にポジティブ・ポライトネス（Brown & Levinson 1987）の傾向を持つ。そして、「ね」を「よ」と対比させた場合、「ね」は「よ」よりも潜在的なネガティブ・ポライトネス傾向を持つと見ることができるという。つまり、「終助詞の意味機能がそのままポライトネスの働きを担うわけではない」(p.154）とし、本質的な意味と発話上の効果（語用論的機能）とを区別している。各終助詞は特有の素性を持ちつつ、文脈によりそのつど語用論的機能が達成されるという

わけである。

Ogi(2017) は「ね、な、よ、さ、ぜ、ぞ、わ」の７つの終助詞を分析し、これらを interactive markers と呼び、全てに共通する特徴として談話に相手を巻き込む相互作用の機能があることを主張している。interactive markers は、話し手が聞き手に対して一方的に内容を伝える monopolistic なマーカー（よ、さ、わ、ぞ、ぜ）と、話し手が聞き手を話題に取り込む働きを持つ incorporative なマーカー（ね、な）に分けられる、という。共起する文末形式や丁寧体･普通体（formality）にも言及しており、主な特徴をまとめると表２のようになる。

表２　Ogi(2017)の interactive markers の主な特徴

	Monopolistic	Incorporative	命令	意向	依頼（て下さい）	普通体	丁寧体
ね	○	×	×	○	○	○	○
よ	×	○	○	○	○	○	○
な	○	×	×	○	○	○	×
ぜ	×	○	×	○	×	○	×
ぞ	×	○	×	×	×	○	×
わ	×	○	×	×	×	○	×
さ	×	○	×	×	×	○	×

以上を踏まえ、本研究では、まず、スピーチレベルに直接関連する特徴である丁寧体・普通体との共起の有無で終助詞を分類する。すなわち、丁寧体・普通体と共起する形式「ね、よ」と、主として普通体のみに共起する形式「その他」とに分けて分析する。さらに「ね、よ」については、滝浦(2008)、及び、Ogi(2017)の分析をもとに「ね」と「よ」を区別する。加えて、伊集院(2004) にならい、終助詞化した接続助詞「けど」「が」「から」「し」も終助詞相当とする。その場合、「けど」と「が」は後続文との間に逆接の関係がない、もしくは、後続文が存在しない、前置き表現・言いさし表現であること、「から」と「し」は後続文との間に因果関係がない、もしくは、後続文が存在しないことを条件とする。そして、意味的な類似性によって「けど、が」と「から、し」に分ける。また、文末の「っす」、「すまん」などの縮約形やもとの語句よりもくだけた表現について

も、文末に来た場合は、スピーチレベルを下げる要素になると考え、「その他」に含める。

まとめると、本研究では、サブ・スピーチレベルを、丁寧体と普通体との共起、及び、その意味的な相違から、「ね」「よ」「けど、が」「から、し」「その他」の５つのカテゴリ（３．４の表６参照）に分類して分析する。

２－４．分析データ

スピーチレベルの研究は、同一の会話においてスピーチレベルを変化（スピーチレベル・シフト）させることで話し手が聞き手との距離をどのように指標しているのかを解明する研究が主として行われている。これらの研究では、初対面場面やビジネスにおける会議などの自然会話が分析データとして用いられている（伊集院 2004, 三牧 2013, Usami 2002）。自然会話データは、例えば年齢が異なる者同士の初対面会話と同い年の初対面会話というように会話参加者の条件をある程度そろえた上で一定数を収集することも可能だが、更に条件を加えて、年齢に違いがある初対面の人／親しい人同士、同い年で初対面の人／親しい人同士のように、人間関係の変数を幾重にも統制したデータを数多く収集することは難しい。

本研究の目的は、年齢や立場、親しさを感じる度合いといった聞き手との関係を話し手がどう認識し、スピーチレベルの選択を行っているのかを計量的に明らかにすることにある。そのため、聞き手との人間関係を統制し、量的にも十分なデータを収集する必要がある。そこで、人間関係の変数を変えることができ、量的にも十分なデータが収集できる方法として口頭による談話完成テストを採用した。談話完成テストは、依頼、勧誘、断りなど、発話行為のストラテジーを解明する研究で用いられるデータ収集の手法であるが、本研究では書かせるのではなく口頭で応答させることで即時的な反応が見られ、より自然な発話が引き出せると考え、この手法を取った。また、比較検証するためには、同じような話題についての話で、発話の長さもある程度そろえなければならない。そのような条件を備えたものとして、働きかけの発話行為を選んだ。分析対象の発話行為を断りとしたのは、依頼や勧誘などは、立場が上の人に対しては行いにくいが、断りは年

齢や立場、親しさなどが異なる相手にも自然に行う行為であるためである。

２－５．研究の目的と課題

研究の目的は、断りに見られる日本語のスピーチレベルの諸形式がどのような距離の指標として機能するのかを解明することで、研究課題は以下の通りである。

研究課題１：聞き手に対する「上」「同等」及び「親疎」の判断がスピーチレベルの選択にどのように関わるのか。そして、その選択がどのような社会的距離と心理的距離を指標するのか。

研究課題２：聞き手に対する「上」「同等」及び「親疎」の判断が、サブ・スピーチレベルの言語形式（終助詞）の選択にどのように関わるのか。そして、その選択がどのような社会的距離と心理的距離を指標するのか。

３．研究方法

３－１．実験協力者

実験協力者は過去５年以上首都圏に住んでいる 18 ～ 22 歳の大学生 62 名（男性 32 名、女性 25 名）である。平均年齢は 19.3 歳、標準偏差は 1.18 であった。

３－２．口頭による談話完成テストの設定内容

場面は、「勧誘に対する断り（以下、対勧誘）」、「依頼に対する断り（対依頼）」、「提案に対する断り（対提案）」の３種類で、聞き手は、「年に２回しか会わない教授（教授）」「仕事のときだけ会うアルバイトの上司（上司）」「部活の親しい先輩（以下、先輩）」「授業の時に会う同学年のクラスメート（クラスメート）」「仲の良い同学年の友達（親友）」とし、表３の組み合わせで状況を設定した。想定される対話者との関係である「上」「同（等）」と「親」「疎」の組み合わせは、「上・疎」「上・親」「同・疎」「同・親」の４通りである[5]。

表３　発話状況と想定される対話者との関係

No.	発話行為	状　況	対話者	対話者との関係
＃１	対勧誘１	送別会参加の誘いを断る	上司	上・疎
＃２	対勧誘２	誕生パーティーの誘いを断る	先輩	上・親
＃３	対勧誘３	ラテン語を一緒に履修する誘いを断る	クラスメート	同・疎
＃４	対勧誘４	誕生パーティーの誘いを断る	親友	同・親
＃５	対依頼１	残業依頼を断る	上司	上・疎
＃６	対依頼２	引っ越しの手伝いの依頼を断る	先輩	上・親
＃７	対依頼３	試験のためのノート貸与依頼を断る	クラスメート	同・疎
＃８	対依頼４	引っ越しの手伝いの依頼を断る	親友	同・親
＃９	対提案１	スペイン語履修を勧める提案を断る	教授	上・疎
＃10	対提案２	授業をさぼってライブに行く提案を断る	先輩	上・親
＃11	対提案３	授業をさぼってライブに行く提案を断る	親友	同・親

３－３．実験方法

口頭談話完成テストの方法は、実験協力者に下記の（8）のような状況を提示し、「書かれた状況を読み、自分ならどういうか想像してみて下さい。相手の発話を聞き終わったら、録音を始めて、その相手の発話に対して返事をしてください。発話するときは、それぞれの状況で自分が必要だと考え得る十分な発話を行ってください」と教示した。そして、相手の発話となる音声キュー（9）を聞き終わったあとに、断りの発話を行ってもらい、その発話を録音した。

録音は、原則、LL 教室のコンピュータの音声録音ソフトを用いて行ったが、IC レコーダーに録音した場合もあった。状況を実験協力者に提示する際には、＃１から＃ 11 に加え、錯乱肢として依頼や勧誘など、計 16 の状況をランダムに提示した。

（8）＃４：対勧誘２、誕生パーティーの誘いを断る、親友

あなたは日本にいます。大学のキャンパスを歩いていると、この一ヶ月会っていない仲の良い友達に会いました。あなたとその友達はこの３年間同じ専攻で勉強してきて、過去には一緒にレポートを書いたこともありますが、この学期は同じ科目を履修していません。友達は自分のところで開く自分の21歳の誕生日のパーティーにあなたを誘いました。誕生パーティーは次の金曜の夜８時からです。一緒によく遊んでいたけれど今学期は会っていない友人達もパーティーに来るそうなので、その人達と会ういい機会だと思いますし、友達の誕生日を祝いたいと思っていますが、残念ながら、その日は行くことができません。

(9) わー久しぶり。元気にしてた？あのさ、ちょっと突然なんだけど、今度の金曜日、誕生日で、それで金曜の夜にパーティーしようと思ってて、来てくれないかな。

３－４．対話者に対する上／同等、親疎の判断

調査者が予想した対話者との上／同等、親疎の関係は表３の通りであるが、各状況で実験協力者が相手との関係をどう判断するかは調査者の予想と異なる場合がある。そこで、本研究では、実験協力者に、対話者との上下、親疎の関係、断りに対する負担の度合についてどう判断するか、５段階スケールで答えてもらった。

上下同等関係については「とても上である」を５、「上でも下でもない」を３、とても下である」を１、親疎関係については「とても親しい」を５、「どちらでもない」を３、「全然親しくない」を１、負担の度合いは「とても負担を感じる」を５、「どちらでもない」を３、「全然負担を感じない」を１と数値化し、各状況についてどのように感じるか、１から５の数字を選んでもらった。結果の平均は表４の通りである。

表４　実験協力者が感じる上下同等関係、親疎関係、負担の度合い

No.	発話行為	状　況	対話者	上下同等	親疎	負担の度合い
＃１	対勧誘１	送別会	上司	4.2	2.8	4.0
＃２	対勧誘２	誕生パーティー	先輩	3.9	4.0	3.9
＃３	対勧誘３	ラテン語履修	クラスメート	3.0	2.5	2.1
＃４	対勧誘４	誕生パーティー	親友	3.0	4.2	3.5
＃５	対依頼１	残業	上司	4.1	3.0	3.8
＃６	対依頼２	引っ越し	先輩	3.0	4.0	3.8
＃７	対依頼３	ノート貸与	クラスメート	2.3	1.8	3.1
＃８	対依頼４	引っ越し	親友	3.0	4.1	3.1
＃９	対提案１	スペイン語履修	教授	4.4	2.0	3.4
＃10	対提案２	授業をさぼる	先輩	3.9	3.9	3.6
＃11	対提案３	授業をさぼる	親友	2.9	4.3	2.6

男女差について統計的仮説検定によって調べたところ、親疎は $t = 0.6207$, df = 680, $p = 0.535$ (n.s.)、上下は $t = 0.2762$, df = 679, $p = 0.7825$ (n.s.)、負担の度合いは $t = 0.6953$, df = 678, $p = 0.4871$ (n.s.) となり、いずれも男女差は見られなかった。そのため、男女差については考慮せずデータを分析することにした。

表５　実験協力者が感じる対話者との上下同等関係と親疎の関係

状況	対話者	上下同等		親　疎	
		数　値	関　係	数　値	関　係
＃９	教授	4.42	上	2.11	疎
＃１，＃５	上司	4.12	上	3.02	親しくも疎遠でもない
＃２，６，10	先輩	4.07	上	3.97	親
＃３，７	クラスメート	2.67	同	2.18	疎
＃４，８，11	親友	2.98	同	4.21	親

表４の結果をもとに対話者ごとの関係をまとめたものが表５である。「教授」は「上・疎」、「上司」は「上・親しくも疎遠でもない」、「先輩」は「上・親」、「クラスメート」は「同・疎」、親友は「同・親」であると実験協力者に認識されていたと考え、分析を行う。

３－５．コーディング

発話を実質的な発話と相づち的な発話に分け、前者を分析対象とした。呼びかけはスピーチレベルが不明なため分析対象から外した。発話は文単位とし、各スピーチレベルは表６のコーディング基準に基づき（10）のように分類した。その際、Usami(2002)、伊集院(2004)、三牧(2013) を参考にした。下線はサブ・スピーチレベルと認定する基準となった言語形式である。断り行動には「不可」「理由」「代案」「将来の約束」などの発話が見られたが、その中で断りを達成する最も中心的な発話である「不可」については、別途スピーチレベルを数えた((10) の太字)。

一発話ずつのスピーチレベルのコーディングは、筆者の一人ともう一人の協力を得て行った。30% のコーディングの信頼度（κ係数）を測定したところ .871

であった。信頼度が確かめられたため、残りは筆者の一人が行った。

表６　文末のスピーチレベルのコーティング基準

スピーチレベル		言語形式（例、説明）
丁寧体	Formal level	丁寧体の言い切り（～です，～ます，～か）
	Sub-Formal level	丁寧体＋終助詞など ・「ね」「よ」 ・「けど」「が」 ・「から」「し」 ・「その他」
普通体	Informal level	普通体の言い切り （一語文，名詞や形容動詞の語幹で終了している文を含む）
	Sub-Informal level	普通体＋終助詞など ・「ね」「よ」 ・「けど」（「が」は使用されない） ・「から」「し」 ・「その他」
その他		中途終了型発話（Incomplete） （「て」「ので」等。後続文が存在しない場合、後続文と因果関係を持たない場合）

(10)（＃１ 対勧誘，送別会，上司）　下線部はサブ・レベルの要素

01　あー今度のー土曜っすか　【Sub-formal】
02　すー土曜ー日はちょっとーほんと残念なんですけど　【Sub-formal】
03　**僕ちょっと出席できないんですよ　←不可の発話**　【Sub-formal】
04　あの僕も佐藤さんにお世話になっていたんですけど　【Sub-formal】
05　まあちょっと申し訳ないんですけど　【Sub-formal】
06　欠席ということでいいですか　【Formal】

４．結果

４－１．全発話のスピーチレベル

対話者に応じた平均発話回数と全発話のスピーチレベルは表７で示す結果になった。

表７　全発話のスピーチレベルの使用回数と使用割合

対話者	Formal	Sub-formal	Informal	Sub-informal	Incomplete	平均発話回数(合計)
教授	99(43.0%)**	85(37.0%)**	0(0.0%)**	1(0.4%)**	45(19.6%)**	3.7(230)
上司	372(61.7%)**	132(21.9%)**	2(0.3%)**	2(0.3%)**	95(15.8%)**	9.7(603)
先輩	522(54.1%)**	225(23.3%)**	19(2.0%)**	62(6.4%)**	136(14.1%)*	15.5(964)
クラスメート	6(1.2%)**	0(0%)**	103(21.1%)**	331(68.0%)**	47(9.7%)†	7.9(487)
親友	9(0.9%)**	0(0%)**	332(33.1%)**	582(58.6%)**	74(7.4%)**	16.2(1002)

注　教授は「上・疎」、上司は「上・親しくも疎遠でもない」、先輩は「上・親」、クラスメートは「同・疎」、親友は「同・親」であると実験協力者に、認識されていた。†p<.10 *p<.05 **p<.01。

各スピーチレベルの使用は対話者により差があり（χ^2= 88.49, df = 8, p <0. 01）、残差分析の結果からも有意差が見られた。上だと感じている相手（対教授・上司・先輩）には Informal と Sub-Informal の使用はほとんどないが、三者を比較すると、対先輩は Informal（2.0%）、Sub-Informal（6.4%）の使用が多少あった。

対教授の Sub-formal の使用割合（37%）が上司に対する Sub-formal の使用割合（21.9%）よりも高く（χ^2= 18.843, df = 1, p <0.01）、先輩に対する Sub-formal の使用割合（23.3%）よりも高い（χ^2= 17.209, df = 1, p <0.01）ことが統計的仮説検定によって言えることから、立場が上で親しくない相手に対するほど、Sub-formal が使用されやすい。さらに、教授に対する Incomplete の使用割合（19.6%）が、上司と先輩への Incomplete の使用割合（それぞれ 15.8% と 14.1%）よりも多いという有意傾向が見られた（χ^2 = 3.228, df = 1, p =0.0724）ことから、立場が上で親しくない相手に対するほど、Incomplete を多用する傾向がある。

クラスメートと親友の場合も同じく、フィッシャーの正確確率検定により、対話者によってスピーチレベルの使用に差があることがわかった（p <0.01）。結果、同等とみなすクラスメートと親友に対しては、Formal 及び Sub-/Formal の使用が皆無に等しかった。また、親疎に関わらず Informal より Sub-informal を多く使用していた（対クラスメート 68.0%、対親友 58.6%）。

４－２．不可の発話のスピーチレベル

不可の発話のスピーチレベルの結果は表８の通りである。不可の発話とは断りを伝える中心的な発話である。対先輩（上・親）、対上司（上・親しくも疎でも

ない)、対教授（上・疎）の Formal と Sub-formal の使用割合を見てみると、対教授と対上司における Sub-formal の使用割合（それぞれ 25.8% と 22.4%）のほうが、対先輩に対する Sub-formal の使用割合（16.1%）より多いという有意傾向が見られた（$\chi^2 = 2.7627$, df = 1, $p = 0.0964$）。また、対クラスメート（同・疎）と対親友（同等・親）の比較においても同様に対クラスメート（46.1%）のほうが対親友よりも Sub-informal の割合が有意に高かった（$\chi^2 = 5.931$, df = 1, $p = 0.0149$）。これらのことから、不可の発話のみについても、親しくないと感じるほどサブ・レベルの発話が使われやすい傾向があると言える。

表８　対話者に応じた不可の発話のスピーチレベルの使用回数と使用割合

対話者	Formal	Sub-formal	Informal	Sub-informal	Incomplete	なし	Total
教授	34(54.8%)**	16(25.8%)**	0(0.0%)*	0(0.0%)**	4(6.5%) n.s.	8(12.9%)**	62
上司	65(52.0%)**	28(22.4%)**	0(0.0%)**	0(0.0%)**	10(8.0%) n.s.	22(17.6%)**	125
先輩	42(22.6%)n.s.	30(16.1%)**	2(1.1%)**	30(16.1%)*	10(5.4%) n.s.	72(38.7%) n.s.	186
クラスメート	0(0.0%)**	0(0.0%)**	17(13.3%)**	59(46.1%)**	7(5.5%) n.s.	45(35.2%) n.s.	128
親友	0(0.0%)**	0(0.0%)**	23(12.2%)**	60(31.9%)**	5(2.7%)†	100(53.2%)**	188

注　教授は「上・疎」、上司は「上・親しくも疎遠でもない」、先輩は「上・親」、ｸﾗｽﾒｰﾄは「同・疎」、親友は「同・親」であると実験協力者に、認識されていた。†$p<.10$ *$p<.05$ **$p<.01$。

４－３．サブ・スピーチレベルに見られる言語形式

表９は対教授、対上司、対先輩のサブ・スピーチレベルに見られた言語形式の出現数とその割合で、表 10 は対クラスメートと対親友の場合である。また、表９と表 10 をそれぞれ、表６によるコーディングの基準でまとめたものが表 11 である。「け」は丁寧体にも共起するが、数も少ないため、「その他」に含めることにした。また、対先輩については、Sub-formal と Sub-informal の２スピーチレベルの形式が見られたため、表９、及び、表 11 ではそれぞれの回数を示した。

表 11 の対教授・対上司と対先輩とを比較すると、対教授・対上司のほうが「けど、が」の使用割合が高い、つまり、断定回避の表現の使用割合が高いことがわかる（$\chi^2 = 24.301$, df = 1, $p < 0.01$）。また、対教授・対上司と対先輩とを比較すると、対先輩のほうが「ね」の使用割合が高かった（$\chi^2 = 5.223$, df = 1, $p =$

0.0223)。

対クラスメートと対親友の比較においては、親しいと感じないクラスメートのほうが「から、し」の使用割合が有意に高い（$\chi^2 = 22.678, df = 1, p < 0.01$）。一方、「ね」の使用では、親しいと感じる対親友のほうが「ね」の使用割合が高かった（$\chi^2 = 7.9888, df = 1, p < 0.01$）。また、「よ」は親しいと感じない相手にはほとんど使用されていなかった（対教授 1.2%、対上司 2.3%、対クラスメート 0%）。

以上の結果から、上／同等いずれであっても、親しさを感じない相手には、断定回避の言語形式が多く見られるが、その形式は、対上では「けど、が」であり、対同等では「から、し」であった。また、上下や同等などの関係に関わらず、親しいと感じる相手に対しては「ね」の使用割合が相対的に高く、親しさを感じない相手には、「よ」の使用割合が低いという結果になった。

表9　対教授、対上司、対先輩のサブ・スピーチレベルに見られた言語形式と割合(%)

教授

Sub-formal	回数	割合
1. けど	36	42.4
2. ね	29	34.1
3. が	15	17.6
4. から／し	4	4.7
4. よ	1	1.2
計	85	100

上司

Sub-formal	回数	割合
1. けど	48	36.6
2. が	46	35.1
3. ね	33	25.2
4. よ	3	2.3
5. け	1	0.8
計	131	100

先輩

Sub-formal	回数	割合
1. ね	87	39.5
2. けど	79	35.9
3. よ	29	13.2
4. が	16	7.3
5. から、し	5	2.3
6. け	4	1.8
計	220	100

先輩

Sub-informal	回数	割合
1. けど	17	27.4
2. ね	13	21.0
3. な	7	11.3
4. から、し	6	9.7
5. よ	5	8.1
5. か	5	8.1
7. さ	3	4.8
8. (か)な	2	3.2
9. や	2	3.2
10. 縮約など	2	3.2
計	62	100

表10　対友人、対親友のサブ・スピーチレベルに見られた言語形式と割合(%)

クラスメート

Sub-informal	回数	割合
1. ね	88	27.1
2. から、し	77	23.7
3. (か)な	43	13.2
4. けど	26	8.0
5. な	20	6.2
6. (よ／けど)な	17	5.2
7. か	11	3.4
7. さ	11	3.4
9. の？	10	3.1
9. わ	10	3.1
10. や	7	2.2
11. じゃん	4	1.2
12. 縮約	1	0.3
計	325	100

親友

Sub-informal	回数	割合
1. ね	199	36.6
2. けど	88	16.2
3. から、し	61	11.2
4. (よ／けど)な	41	7.6
5. よ	33	6.1
6. わ	25	4.6
6. か	25	4.6
8. (か)な	20	3.7
9. さ	17	3.1
10. の？	11	2.0
11. じゃん	10	1.8
12. 縮約など	5	0.9
12. や	5	0.9
14. ぜ	1	0.2
14. もん	1	0.2
14. け	1	0.2
計	543	100

表11　対話者によるサブ・スピーチレベルに見られた言語形式の割合(%)

	Sub-formal			Sub-informal
	教授	上司	先輩	先輩
けど、が	60.0	71.7	43.2	27.4
から、し	4.7	0	2.3	9.7
ね	34.1	25.2	39.5	21.0
よ	1.2	2.3	13.2	8.1
その他	0	0.8	1.8	33.8
計	100	100	100	100

	Sub-informal	Sub-informal
	クラスメート	親友
けど	8.0	16.2
から、し	23.7	11.2
ね	27.1	36.6
よ	0.0	6.1
その他	41.2	29.9
計	100	100

5．考察

断りの発話全体、不可のみの発話、いずれにおいても、自分より上であると感じる相手に対しては丁寧体（Formal・Sub-formal）が使用され、同等であると感じる相手に対しては普通体（Informal・Sub-informal）が使用されていた。ただし、上だと感じていても対教授や対上司ほどには上であると感じていない対先輩には普通体も観察された。立場が上であると感じる相手に対しては丁寧体、同等であると感じる相手には普通体が通常使用されていたことから、限られたデータであるが、その使い分けは聞き手に対する社会的距離の指標に主に関係すると言える。

サブ・スピーチレベルについては、断りのスピーチレベルの全体傾向と不可の発話のデータから、上／同等といった関係に関わらず、親しさを感じない相手ほど、サブ・スピーチレベルが用いられやすいという結果になった。このことから、サブ・スピーチレベルは主として心理的距離の指標と関わっていると思われる。

先行研究では、Formal よりも Sub-formal、Informal よりも Sub-Informal のほうが、「ややレベルが低い（三牧 2013）」、「待遇レベルが低い（佐藤・福島 1998）」と主張されてきたが、本研究の結果から、これらサブ・スピーチレベルの発話は、社会的距離の指標というより心理的距離、そして、心理的距離のうちの親しさよりも疎遠であることを指標することに、より機能する傾向があると言えそうである。

ただし、サブ・スピーチレベルの言語形式と言っても様々あり、全ての言語形式が心理的距離の大きさに関係しているとは言えない。そこで、終助詞に代表されるサブ・スピーチレベルに見られた言語形式をカテゴリごとに分析した結果、対話者の立場を自分より上位に感じるかどうかに関わらず、親しいと感じる相手に対するほど「ね」の使用が多かった。加えて、「よ」は親しいと感じる相手にしか使用されず、親しさを感じない相手には断定を避ける表現の「けど」「が」「から」「し」や中途終了型発話がより多く使われているという結果になった。

文末の言語形式とポライトネスとの関係については、敬意や親しさなどのポライトネスの指標は文脈によって規定されるものであるため、「ね」や「よ」が一

義的にポジティブ・ポライトネスを指標すると結論づけることはできない。本データでは、親しいと感じる相手に対するほど「ね、よ」がより使用されていたことから、「ね、よ」は心理的距離の近さを指標しており、そのことが文脈によってはポジティブ・ポライトネスとして機能することにつながっていると考えられる。また、親しさを感じる相手にしか「よ」が使用されなかったことから、「よ」は「ね」よりもさらに心理的距離の近さを指標する傾向が強い可能性がある。「よ」に押しつけがましさを感じることがあるのは、この心理的距離の近さの指標と関係しているのだろう。つまり、「よ」によって通常以上の距離の近さが意識され、押しつけがましさという発話上の効果が現れたのだろう。一方、断定回避の「けど、が」「から、し」「中途終了型発話」は心理的距離の大きさを指標する。それ故、親しみを感じない相手に対して、より多く使われていたのであろう。

以上をまとめると、聞き手を上の立場の者だと感じる場合は「丁寧体(Formal 及び Sub-formal)」、同等だと感じる場合は「普通体（Informal 及び Sub-informal)」を使用する傾向があることから、「丁寧体」は社会的距離の大きさ（敬意を持って遇していること）を、「普通体」はその距離の小ささ（敬意を表する必要のないこと）を指標すると言える。一方、親疎関係を感じる対話者には言い切りではなく、サブ・スピーチレベルが使用される傾向が強かったことから、心理的距離はサブ・スピーチレベルによって指標される傾向が強いと考えられる。心理的距離のうち、「ね、よ」、特に、「よ」は心理的距離の近さの指標に深く関わっている。親しさを感じず、上の立場だとみなす聞き手に対しては「けど、が」、親しさを感じず同等の立場であるとみなす場合は「から、し」の使用が多いというように、言語形式は異なるものの、両者とも断定回避の表現が使用されていたことから、断定回避の言語形式は心理的距離を保つ指標として機能することがあると考えられる。

6．まとめと今後の課題

これまで丁寧体は、聞き手に対し社会的な距離と心理的距離が大きいことを表し、普通体は社会的な距離と心理的距離が小さいことを表すというように社会的

距離と心理的距離が渾然一体に論じられてきた。しかし、サブ・スピーチレベルを設け、その言語形式を量的に分析すると、社会的距離と心理的距離の指標が明確化できることがわかった。

本研究のデータから得られた結果をまとめ、スピーチレベルの使用を簡略して提示するとすれば、次のようになる。対話の相手に対して、社会的距離を指標したい、つまり、敬意による距離を表したいときには、親しさに関わらず基本的に丁寧体を使用する必要がある。「ね」は一般に丁寧体、普通体いずれにも付加し親しさの指標に貢献し、「よ」は専ら普通体に付加することが多く、心理的距離の近さの指標に貢献する傾向があると言える。他方、「が」は丁寧体に、「けど」は丁寧体、普通体いずれにも付加し、心理的距離が大きいことを指標したいときに用いられやすい。ただし、以上述べたことは、あくまで本データで見られた傾向であり、ある形式が一義的に社会的または心理的距離の指標を示すわけではなく、発話上の意味は、相互作用によって決定されることに留意する必要がある。

また、実際には社会的立場が同等であると考えられる近所の人や知らない人、初対面の相手に丁寧体が使用される場合もあり、このような場合、丁寧体使用は社会的距離ではなく心理的距離を表しているのではないかという反論もあろう。しかし、丁寧体は、属性として社会的な立場が同等である場合でも、それを用いることによって、相手を敬い、相手に敬意を表す態度を示している（社会的距離を指標している）と言うこともできるだろう。そして、心理的距離の遠近は終助詞などで調整しているのだとも考えられる。同様に、子どもを叱るときや夫婦喧嘩のときに丁寧体が使われるのは、心理的距離の表明とも考え得るが、一方で通常は敬う必要のない相手に敬いを表す丁寧体を殊更使用することで怒りや皮肉などの演出効果を狙ったとも考えられる。このような場合に「もう知りません」のように丁寧体の言い切りが用いられやすいのは、これにより心理的距離の大きさも同時に示しているのかもしれない。ただし、こういった発話上の効果（語用論的機能）と社会的・心理的指標の関係を証明するには、他の言語行為についての調査、やりとりを伴ったより自然な会話をデータとした分析を行うなど、さらなる検証を行う必要がある。

注

1　社会構築主義においては、言語形式とその社会的意味は一対一対応なのではなく、相互作用を通して構築されると考えられている（Eelen 2001）。筆者らも社会構築主義の立場を支持するが、本データは対話ではないため、通常、話し手はそう想定して発話したのだろうという判断を基に社会的距離と心理的距離の認定を行う。

2　話し手と聞き手の実際の社会的な立場と、話し手がその話し方によって聞き手をどのように遇しているかは、異なる次元の問題で、本稿では後者を扱う。心理的距離も同様、話し手が発話によって聞き手を親しい者として扱っているかどうかを本稿では議論する。

3　(4) の発話は一般に女性らしくない発話と見なされる可能性があるが、本稿では、女性語や男性語については、議論の対象としない。

4　中途終了型発話（incomplete）とは、Usami（2002）の用語で、敬体・常体どちらのマーカーでもない発話（No-Marker）のことである。また、「て」や「ので」などの場合、「(あり）まして／ますので・(あっ）て／（ある）ので」のように、「て」「ので」の前が「です・ます」を伴う場合とそうではない場合がある。これらは待遇度に関わるが、句レベルのスピーチレベルであり、文レベルのスピーチレベルではないため、分析の対象としない。

5　「対提案」の「同・疎」の状況を実験後に外した。パイロット実験の段階では出なかったが、設定していた状況（授業をさぼってライブに行く提案を断る）を親しくないクラスメートから提案されることは少ないとの意見が実験後実験協力者から出たためである。

参考文献

伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け－母語場面と接触場面の相違－」『社会言語科学 第6巻第2号』pp.12-26.

片岡邦好（2002）「指示的、非指示的意味と文化的実践－言語使用における『指標性』－について」『社会言語科学』第4巻第2号 pp.21-41.

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞－用例と実例－』国立国語研究所.

佐治圭三（1957）「終助詞の機能」『國語國文』第26巻第7号 京都大学国文学会 pp.23-31.

佐藤勢紀子（2000）『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構』平成10年度～

平成11年度文部省科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書

佐藤勢紀子・福島悦子（1998）「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要４』pp.31-40.

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

滝浦真人（2016）「第３章社会語用論」加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房 pp.77-103.

三牧陽子（1989）「待遇レベル・シフトの談話分析」『AKP 紀要３』AKP 同志社留学生センター pp.34-50.

三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿と仕組み』くろしお出版.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge University Press, Cambridge.

Eelen, Gino. 2001. *A Critique of Politeness Theories.* Manchester: St. Jerome Publishing.

Hasegawa, Yoko. 2006. Embedded soliloquy and affective stances in Japanese. In Suzuki, S. (Ed.), *Emotive Communication in Japanese.* John Benjamins, Amsterdam, 209-229.

Ochs, Elinor. 1990. Indexicality and socialization. In James. W. Stigler, Richard. A. Schwerder, & Gilbert. Herdt (Eds.). *Cultural psychology: Essays on comparative human development.* 287-308. Cambridge: Cambridge University Press.

Ogi, Naomi. 2017. *Involvement and Attitude in Japanese Discourse: Interactive markers.* John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Usami, Mayumi. 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation; Some implications for a Universal Theory of Politeness.* Tokyo: Hitsuzi syobo.

付記

本稿は、科学研究費助成事業・基盤Ｃ・課題番号 6K02798（研究代表者 ボイクマン総子）、および、基盤Ｃ・課題番号 6K01058（研究代表者 森一将）の助成を受けている。

ボイクマン フサコ（東京大学）・モリ カズマサ（文教大学）

Speech levels and social and psychological distances: Analysis of refusals

BEUCKMANN Fusako and MORI Kazumasa

The aim of this study is to verify quantitatively how speech levels are used according to power and closeness towards listener, and index social distance and psychological distance. We analyzed refusal data collected by oral discourse completion test from 62 Japanese language native speakers, employing two main speech levels and their respective sub-speech levels for analysis. Results showed social distance is primarily indicated by use of (Sub-) formal or (Sub-) informal levels, whereas psychological distance is mainly expressed by language items categorized by sub-levels.

Traditionally, social and psychological distance have been discussed together, but by employing sub-speech levels, their respective indicators can be distinguished.